

PDF で提出してください

助成番号

21-G04

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】 汪牧耘

【所属】 (助成決定時) 東京大学大学院 新領域創成科学研究科 国際協力学専攻

【研究題目】 中国の国際開発知：概念、現場経験と学問形成の隙間に

【研究の目的】 (400字程度)

本研究の目的は、影響力が拡大しつつある中国の国際開発をその内側から理解すべく、中国の国際開発を形づくっている知のあり方を明らかにすることである。本研究では「中国の国際開発知はどのように形成されてきたのか」という問いをもとに、中国において①「開発」という概念がどのように誕生したのか、②開発をめぐる事象はどのように学問の対象となったのか、③開発知は現場経験との往来の中でどのように生産され更新されているのか、という3つの作業的問いに取り組む。中国の国際開発を形づくってきた知のあり方の歴史的変遷とその特徴を、国際的な視野の中で明らかにすることで、これまで支配的だった欧米主導の開発知を相対化し、国際理解を促すことを試みる。日本語・英語・中国語を用いて複数言語間の知の往来を視野に入れることにより、中国をめぐる認識を固定観念やイデオロギーの対立から解放し、「国際理解・協調」を促進することに大きく寄与することを目指す。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

本研究は中国の国際開発知の形成を明らかにするために、開発概念・開発研究・開発経験という3つの側面について2つの言説分析(通時的分析・国際的比較)を行い、従来および今日の開発現場における諸経験が中国の国際開発知の形成において回収され捨象されてきた原因を明らかにした。ここで取り組む中心的なテーマは、①開発概念の比較研究、②開発研究の比較研究、③開発協力の経験の知識化という3つである。具体的な内容・方法を以下に示す。

(1) 日本・中国・欧米の「開発」概念史の比較研究：既存の研究成果を含めて、東京大学、国立国会図書館、北京大学、(中国)国家図書館のデータベースや文献を使用し、日本・中国・欧米の「開発・発展」(development)という概念がどのように生成され、変遷してきたか、その文脈の異同を明らかにする。そのため、中国基本古籍庫をはじめとする6つの言語資料のデータベースを用いて、日・英・中国語の文献調査と比較分析を行った。

(2) 中国の開発研究の構築の経路：中国において「開発」がどのように学問の対象になったのかという歴史的な背景を明らかにする。代表的な研究者の著作、中国の開発研究の作

り手のニュースレター・活動・発言などのドキュメントを中心に、中国における国際開発の議論の形成と展開を明らかにした。その際、日本における開発研究を比較軸として視野に入れている。

(3) 中国の開発協力経験とその知識化(ラオスを事例に)

第1に、中国の対ラオス開発協力の全体像を把握するために、援助政策およびその実施実態に関するデータ収集を行う。開発協力の事業内容として、インフラ整備、人材育成、農村開発・住民参加事業、孔子学院の活動などを取り上げる。第2に、ラオスで行われた中国政府の貧困削減のモデル事業の関係者を対象に、オンラインにてインタビューを実施し、実際の現場経験と中国人研究者による国際開発の主張を分析する。

【結論・考察】(400字程度)

中国の国際開発は、一見すると挑発的で、異質な存在ですらある。しかし、その知識生産の系譜に目を向けると、国・言語を越境してきた人びとの開発実践が目映る。中国の国際開発知は、表面上は欧米や日本を批判し、それと対立するかのように見えるものの、その構築を支えている開発実践の総体には、欧米や日本に共通する経験が少なからず編み込まれている。今日、中国人研究者の中には、自国の国際開発・援助は欧米とは違い、「対等性」を重視し「経験をありのまま共有している」と主張するものがある。ところが、ラオスの事例から分かるように、中国も欧米と同様に、現地社会の力関係や社会的・文化的差異の影響を受けており、事業を進めるにあたって一定の介入が求められる場面もあった。中国の国際開発知を理解するため、その表面に現れる差異だけではなく、その地下にある概念・実践の関係性に目を向けることが重要である。非欧米社会の国際開発知が持つ普遍的意味をより広い視野で考察するために、今後はほかの国や地域と照らし合わせて、見解を深めていくべきだと考えられる。